

日本の昔話

21

日本放送出版協会

丹後の昔話

稲田浩二監修

岡節三 ■ 細見正三郎 編

監修者

いな だ こう じ
稲 田 浩 二

1925年岡山市生まれ。広島文理科大学を卒業し、現在、京都女子大学文学部教授。

主著・主論文に『日本昔話通観』（共編）『昔話は生きている』『説話文学必携』（共著）「日本霊異記話型の一考察」「今昔物語集の説話性に関する試論」など。

編者

おか せつ ぞう
岡 節 三

1931年生まれ。現在、立命館大学教授。専攻はアメリカ文学であるが、昔話関係の仕事としては『日本昔話通観』（共編）『世屋の昔話』（共編）『久美浜町の昔話』などがある。

ほそ み しろう ざぶ ろう
細 見 正 三 郎

1924年生まれ。農業のかたわら、丹後民話研究会、奥丹後地方史研究会の中心として、民話集『丹後の民話』（現在第4集まで出ている）を編集。他に、『世屋の昔話』（共編）などがある。

日本の昔話21

〈検印廃止〉

丹後の昔話

定価 1800 円

昭和53年 2 月20日 第1刷発行

監修者 稲 田 浩 二

編 者 岡 節 三

細 見 正 三 郎

発行者 藤 根 井 和 夫

印刷 凸 版 印 刷

製本 石 津 製 本

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1
郵便番号150 振替東京1-49701

©1978 Koji Inada

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Setsuzo Oka Shozaburo Hosomi

0339-015021-6023

いのち長きものへの畏敬

稲田 浩二

遠いわれらの祖先から口づたえに伝えられてきた日本昔話の現状は、たとえていえば、目に見えない地下水のようなものです。それは、あわただしい情報と速度に飲みこまれた人々にとっては多分だんの生活には無縁であり、ときおりふとなつかしむ過ぎ去った日々、ふるさとのようなものでありましょう。けれども、その地下水は、いまもつつましく生きている、心ある人々がその気になつてたずねるならば、やさしくことばをかけ、耳を傾けるならば、意外にみずみずしいことば——昔語りが地上にわき出るものなのです。わたしどもは、ここに一九七〇年代の一つの証言として、日本の各地にわたるこの種の実験をありのままにみなさまにご報告いたしたいと思っています。

昭和の初年、柳田国男が昔話を学問の対象とした当時、すでに昔話は生活の表面から姿をかくしかけていたようです。柳田国男はこれを愛惜し、一日も早い調査をと人々に訴えています。それから半世紀たったいま、昔話はいっそう地表から深くもぐり、代ってブラウン管や活字の「民話」が

人々の目をうばっております。それにいちいち目くじらをたてるというのではありません。新しい皮袋に盛られて、「民話」はどこへ向けていくのか、多少の不安をもちながらも見守ってゆきたい、とわたしなどは思っております。ただ、これまでこれほど一律に昔話が扱われたことはなかったので、昔話の世界も年とともに従来なかった変化を蒙るのではないかと思います。いや多分それはもうある程度まで進行しているにちがいありません。東北に伝承してきたはずの昔話が、ブラウン管や活字をへて、こつ然として山陽地方に現われてくるということです。したがって、昔話が村や町、家々に伝わるという土着的・風土的な本質は、よほど注意深く扱わないと裏切られることになります。

「日本の昔話」はこの意味でかたくなに、村々家々に口づたえされてきた昔話に限って収めることにしました。編集にたずさわる皆さんはいちいち語り手のところにおもむいて、一つ一つの話を聞き出し、録音テープに収め、これをそのまま文字に移すことにしました。それはぶこつだけれど、ありのままの口づたえの姿を最もよくとどめるものだと思うからです。したがってこれは、読者のかたにそれほど口ざわりがよくない食べものかもしれない。土から掘り出したままの、いわば料理の素材だからです。ただそれをじっくり噛みしめていただけるなら、現代日本のつましい素顔の一つに出会えるはずです。テレビや書物でなめされない、日本人の飾らないものの見方、表現、よろこびとなげき……総じて日本人の人生のありのままがこめられています。

どうしたわけか、これらのことばは、同じ棟の下に住んでいる家族でさえも耳にすることがほとんどないものです。語り手ご自身も多くの人が何十年ぶりに語ったという種類のものです。したがって、大部分の話がたまたまよい聞き手の編集者に会って、水を得た魚のようにふき出して世に出たものです。いまわたしどもは、これを命長きものへのいとおしみと敬畏の念をもって世にのけたいと思います。これがよい読者をえて、新しい明日をうんでいくかとなれば、語り手とわたしどもの望外の幸せであります。

一九七七年四月

はしがき

「丹後ちりめん」のふるさと丹後地方は京都府の北端にあつて、そのことばのやさしいひびきとは裏腹に厳しい自然的条件を持つ風土である。とりわけ冬には裏日本特有の強い季節風とはげしい雪が、山のひだひだにしがみつく農家を深い静寂の中に閉じ込める。そして農民たちはそのむかし、家族みんなでいろりを囲み、手仕事に励みながら、長い冬をすごしたものだ。丹後の昔話を守りはぐくんだのは他ならぬそうした人たちのあたたかい団らん場であり、子どもたちが「むかしばなし、してくんやあ」とせがんだ情景が目に見えるようだ。

しかし、それももう過去のものだ。家族関係や生活環境がすっかり変つてしまい、若い世代はしきりに町へ出ることを考える。丹後地方のすみずみまで立派な道路が作られたが、皮肉にもそれは故郷を離れて町をめざす人たちの通る道となった。丹後は今や典型的な過疎の地だ。たとえば、丹後半島の山奥に足を運べば、立ち並ぶ家々に人影もなく、古いものから次々と壁が落ち屋根が崩れる有様を目にすることは決して珍しくない。郷土が失われるとき、そこに根ざした文化も失われる。だとすれば、廃屋は昔話の運命を象徴しているのかもしれない。こうして、昔話の調査にむかう者は「急がねばならぬ」という切実な思いに駆り立てられる。昔話の聞き手を失つて久しい人た

ちの思いも同じであろう。

ところが、丹後地方は大陸文化、出雲文化、大和文化の接点として古くから開けた地方であり、伝承文化の宝庫であるにもかかわらず、昔話の調査となると必ずしもじゅうぶんにはなされていない。こうした状況の下で『丹後の昔話』が刊行されるわけであるが、編者はこの機会に丹後地方全域に調査の足をのばし、いわば丹後の昔話の全体像をとらえようとした。もちろん、このようなことが編者だけでできるものではなく、多くの時間とたくさんの人々の努力が必要である。本書に収録した昔話九八話は、一九七〇年以後一九七七年までの、延べ約九〇人の研究者・学生による調査資料（約八五〇話）の中から選んだものであり、丹後地方の二市一町すべてにわたるよう配慮した。（採集地図参照）これによって所期の目的がいくぶんか達せられたのではないかと思う。

なお、編者は丹後の昔話を奥丹後、西丹後、南丹後の三つの地域に分けて記載している。これは、解説でも述べるが、便宜的な分け方ではなく、それぞれの地域の昔話の内容や伝承の特性を重んじたものである。調査にあたっては、与謝郡伊根町、熊野郡久美浜町、加佐郡大江町をそれぞれの地域の重要地点として二十数人の学生を中心とする調査団を派遣し、そこからの本書への収録話数も多くしている。（ただし、伊根町のみは京都府立総合資料館から『丹後伊根の昔話』がすでに出版されているので、同一話型の重複を避け、話数についてもやや控え目にした。）その他の地域はほとんど編者が調査した。

これらの調査にあたっては、数限りない方々のあたたかいご援助をいただいている。特に、大がかりな調査団を引率して行った町では、町教育委員会や老人会などの献身的なご協力がなければほとんど何もできなかったであろう。また、編者が個別にお訪ねしたたくさん語り手の方々は編者をまるで家族のように迎えてくださった。一人一人お名前を記すべきではあるが、あまりに数多いため、失礼ではあるがまとめて厚くお礼を申しあげる。編者は、誰よりも先に、そのような丹後に生き丹後を愛する方々に本書を捧げる。

さらに、いろいろご指導をいただいた監修者の稲田浩二氏、本書のためにすばらしい挿絵を描いてくださった織戸昭徳氏（元京都府中郡峰山小学校長）、原稿の清書その他を快く引き受けてくれた森篤子（京都教育大学卒業生）、若狭珠美（京都女子大学学生）の両君、何かとご迷惑をおかけした日本放送出版協会の入部皓次郎、長岡信孝の両氏に感謝の意を表したい。

一九七七年二月

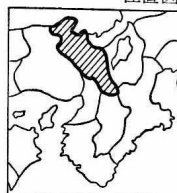
編 者

凡 例

- (1) 本書に収録した話はすべて調査の録音テープから直接翻字したものである。
- (2) 本書では丹後地方を奥丹後、西丹後、南丹後に分け、それぞれの話を原則として、本格的な話りのもの、笑い話、動植物にちなんだ話の順に配列している。
- (3) 話の題名は語り手自身の述べたものを優先するようにしたが、それが適切でなかったり、題名がなかった場合は、編者が内容に応じてつけた。
- (4) それぞれの話の後に『日本昔話名彙』（柳田国男監修・日本放送協会編、日本放送出版協会刊）の話型名を記した。また、『日本昔話名彙』になく、『日本昔話集成』（関敬吾著、角川書店刊）に該当する話型がある場合はその番号と話型名を記した。
- (5) それぞれの話の話型名の後に、語り手の現住所と氏名を付した。
- (6) 方言や語り手の口調にできるだけ近づけるような表記法をとった。例えば、「ごっつおう」（ご馳走）「出ゃあて」（出して）「後を継がせたやで」（後を継がせたかったので）「刺やて」（刺して）などがそれであるが、その他に「木い樵りい」「今度あ」「腹あ痛えで」「お殿さんの脇い」などのように「を」「に」「は」「へ」の助詞のなまりを小さい文字で記した。

京都府行政区域図

位置図



兵庫
県

福井
県



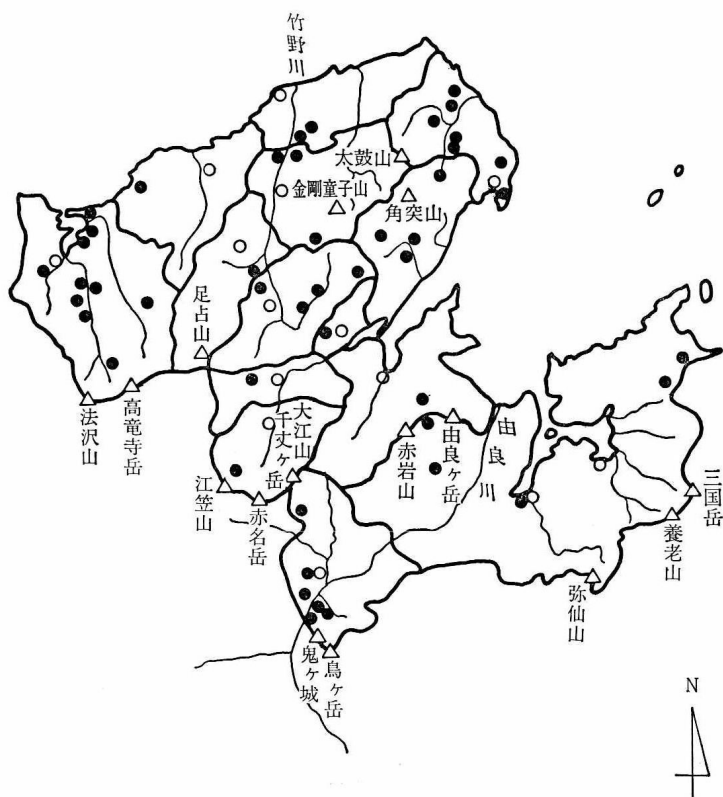
太線——本書における丹後の
三分区を示す
細線——京都府の市町村の
境界線を示す

本書における丹後の地域区分

- | | | |
|------------------|---|-------|
| 1. 与謝郡伊根町 | } | 奥丹後地方 |
| 2. 竹野郡丹後町 | | |
| 3. 竹野郡弥栄町 | | |
| 4. 宮津市(北部, 旧与謝郡) | | |
| 5. 与謝郡岩滝町 | | |
| 6. 竹野郡網野町 | } | 西丹後地方 |
| 7. 熊野郡久美浜町 | | |
| 8. 中郡峰山町 | | |
| 9. 中部大宮町 | } | 南丹後地方 |
| 10. 与謝郡野田川町 | | |
| 11. 与謝郡加悦町 | | |
| 12. 宮津市(南部) | | |
| 13. 舞鶴市 | | |
| 14. 加佐郡大江町 | | |



昔話採集地図



太線——丹後地方の市町の境界線を示す。

細線——主要河川を示す。

△ —— 標高500メートル以上の山を示す。

○ —— 市町の中心地を示す。

● —— 本書に収録した昔話の採集地を示す。

目次

いのち長きものへの畏敬.....1

はしがき.....5

凡例.....9

地図.....10

昔話

奥丹後地方

大年の火.....24

米出し地蔵.....27

姥捨て山.....30

狐の恩返し.....35

食わず女房.....38

鯉の恩返し.....41

腰折れ雀.....44

こぶ取り水	45
舌切り雀	48
地主の発心	56
じんじろべえとじんたろべえ	60
大蛇退治	66
天福地福	69
橋立明神と子ども	72
龍宮の贈り物	75
堤の人柱	77
屁こき爺さん	80
蛇婿入り	84
へわの婿入り	89
見るなの蔵	98
長者の婿選び	102
若返り水	105
焼き餅和尚	107
柴を刈らずに草刈った	109